

Re: 夢を見つけた男の
異世界生活

変態権

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夢をようやく見つけた彼は、その夢が叶えられたような世界に迷い込む。

目次

異世界召喚	1
精霊使い	22
盗品蔵にて	35

異世界召喚

「全く、近頃の若いモンは金も持つてねえのか」

イラついたように啞えた葉を揺らし、屈強な男は商品棚を整理する。

その険しい顔立ちから粗雑な雰囲気を感じさせるが、その手際はひどく丁寧なものであった。

商人として奇怪だが一流の信念を持つ彼、カドモン・リツシュは不躰な一文無しにルグニカ王国の貨幣事情を厳しく突きつけてやった。あまりにも田舎者ばりの無知な様子に少々同情したが、商人たるもの去る者追わず。いなくなった客より新しく訪れる客の方が大事なのだ。彼の精一杯の営業スマイルにより、遠のいていく客足から学んだ商いの術である。

そんな彼に商いの神が憐れんだのか、新規のお客様がやって来る足音。

先ほどのような非常識田舎モンでないことを祈りながら、精一杯の強面スマイルで出迎える。

「あいよ、いらっしやい。何か入り用かい」

「あーいや、ちよつと聞きたいことがあるんすけど」

「まあ、まあ不思議な格好をした客に再び出会い、さらには購入ではなく質問ときた。頼むから普通の客が来てくれねエかとカドモンは少しばかり失望する。

その様子を見て少しばかり不機嫌になる青年。自然と語調が強まる。

「あの聞いてんすか」

「はアーツ…、ああ聞いている聞いてる。で、何が知りたいんだ？」

非常に態度が悪い青年に溜息を漏らす。これならまださつききの田舎モンの方がまだマシだったぜ。と言うように。

「……………どこどこだかわかりますか？」

「どこって兄ちゃん、この繁栄っぷりからしてわかんねエか？ ルグニカだよルグニカ。一体どこから来たんだ？兄ちゃんといいきさつききの田舎モンといいい…」

そう言つて頭をガシガシとかく。その言葉を受けて青年の目は一層細まる。

「留群尼…？ あー、すんませんその、東京のどこスか、それ」

「トウキョウだあ？ 兄ちゃん何言つてんだ？ どこも何もここはルグニカだ。俺がガキの頃も親父がガキの頃もそのまた親父がガキの頃もずっとルグニカって決まってるだよ。トウキョウなんて聞いたことねえ」

「……………あんた何言つてんだ？」

青年が哀れみの表情を浮かべ商人を見つめる。しかしこの場では哀れみを向けられるのは彼の方だ。

「要領を得ねエな兄ちゃん。ここはルグニカで兄ちゃんが言うトウキヨウとやらはここにはねエし聞いたこともねエんだよ」

「あつそう。じゃあここは日本のどこだよ」

「また知らん言葉を吐きやがる。兄ちゃん真正銘の田舎モンだな！俺が知りたいぐらいだぜニツポンなんぞ」

「ああ？ふざけるのもいい加減に……」

青年が苛立ちを募らせ、怒号を上げようとした瞬間、後ろからヌツと大きなトカゲのような大男が現れた。

「いよおカドモンさん、儲かってるかい？」

「ああ、まあボチボチだな」

「カドモンさん、嘘は良くねえなあ」

トカゲの男は笑いながらリングゴに酷似した果実を手に取り、金を支払う。どうやらカドモンの上客のようだ。

「毎度あり。これアサービスだ、持ってけ」

そう言つてカドモンはもう一つ赤い果実を渡す。

「おおつとすまねえなあ。こんなにサービス精神溢れた店、なんで客が来ないかねえ」

「おかげで商売上がったりだ、おまけに妙な客までやってくるしよお」

「その妙な客つてのはこいつのことかい？」

妙な客呼ばわりされて些か不満を覚えた青年。しかしそれ以上に今現在目の前にいる生物の存在が信じられないのだ。

その黒い双眼は一直線にトカゲの亜人を捉える。

「どうやら辺境の田舎モンみてエでよ、亜人さえ見たことがねエそうだ」

「はあ、道理で」

トカゲの亜人はニツと笑い、青年に近づく。

「よお 亜人をみた感想はどうだい？ 田舎モンの兄ちゃんよ」

「…… どうやら夢をみてるらしいな、こんな悪夢はやく目覚めるに限るぜ」

「カツカツカツカツ！ そうかい夢かい！ そいつぁいいや！ じゃあはやく目覚めるよう冷たい水をぶっかけてもらうってのはどうだい？ え？」

そう笑うとカドモンに挨拶をし、去っていった。そうして呆然としたままの青年と水の用意をするカドモンが残った。

「で、どうだい。夢は覚めたかね」

「……冷てえ」

「そりやよかつた。一度頭の方も冷まさなきやな」

肩まで伸びた長い髪の毛がびしょ濡れになっており、青年は冷ややかな目でカドモンを見つめる。まあ悪かつたとしても言うようにカドモンはタオルを渡し、青年は荒っぽい手つきで濡れた髪を拭いた。

「これでわかつたろ？ 夢じゃなくて現実だよ現実。わかつたらなんか買うかどっか行け」

「それが客に対する態度かよ……」

あまり人の事は言えない青年である。

「まあリング買ってけよ、ここに来たんなら一度食っておくべきだぜ。安くしとくからよ」

「いらねえ、てか金がねえ」

「お前も一文無しかよっ！」

そうして彼は露天商を後にした。正確に言えば追い出されたのだが。

一文無しのこの状況、彼の荷物はポケットに入っていたガムの包み紙と物言わぬ鉄の大型二輪の鉄騎。そして：

銀の配色にS M A R T B R A I Nのロゴがデザインされたアタッシュケース。

思い返せば、いつのまにか妙な感覚に目を擦り、再び目を開けば自分がいた場所とはまるつきり異なっていた。

耳や尻尾の生えた人型の生き物。髪や目の色が赤だったり黄色だったり、服装も現代には似つかわしく中世あたりのもので、極め付けに馬車馬の代わりに四足歩行の巨大なトカゲのような生き物を用いていた。最初こそ驚きはしたものの、すぐに現代のジャージを着た青年を見かけたため、なんらかのイベントだと判断し、とりあえず車道に出ることにした。しかしそのようなものは見つかるはずもなくかんかん照りつける陽光に体力を奪われていくだけだった。

このイベントを考えたヤツはひどく悪趣味なヤツだと悪態をつきながら重い鉄の馬を引いていき、暇そうな屈強な男に道を尋ねた。さらにそこで偽物には見えない本物の

亜人に出会い、さらにこれが現実であるということを無残に突きつけられた。

それから、涼しい日陰に座り込み、疲労した身体を休めた。頭の方もいくらか冷えたためゆっくり考えることができた。しかし考えれば考えるほど不可解と苛立ちが湧き上がるので、あまり頭を使わないように努める。

わかることは、ここが日本ではないということ。その理不尽な現実はどう対処していくか、それが青年の課題だった。

「ホントになんてこうなっただんだかさっぱりわかんねえ」

再び湧き上がった苛立ちを隅に退け、彼は人通りが少ない道を歩んでいく。

「……なんか話違わね？」

異！世！界！召喚じゃねえーのかよッ！俺の主人公設定は何処に行ったんだよおーッ！！ケータイも繋がんねえし！！俺を召喚した美少女はどこに消えたんだよーッッ！！！！」

哀しき獣のごとく咆哮をあげている田舎者、いや辺境の田舎よりもっと辺鄙なところから彼はやって来たのだった。

菜月スバル、17歳。平凡な顔立ちで体つきは良好。目つきが悪いのが特徴である。

何よりも彼は、日本出身である。

彼は現代の日本から異世界召喚されたごく普通の引きこもり青年だ。

ある日の夜にコンビニで夜食を買い、気がつけば異世界の街にいた。

最初こそ驚いたが、すぐに異世界だと判断し、大いに喜び散策を始めた。

途中で誰かの視線を感じたが異世界人の視線だと断定。この格好は異世界人にとって物珍しいものだから仕方がないと思い、本当に異世界なのだという認識に酔いしれた。

しかし、彼が思ったような召喚ではなかったらしく知恵を誰かに与えようとも、文化の水準レベルは程よく素人が口に出すべきものではなかった。

そうして彼は歩き疲れ、路地裏で座り込んでいた。

「だいたい初期装備が貧弱すぎだろ… 割り箸でどうやって戦ってたんだよ…

ハッ！まさかこの割り箸で異世界を意のままに掴めという神のお達しでは!!? って納得出来たかアーツ!!」

こうして一人コントをすることでどの世界でも変わらない理不尽を嘆いていた。

そんな時、路地裏の奥から三人の人影が現れた。

「おやつときたかッ！俺のこと召喚した美少っ…女」

「テメエなに一人でブツブツ言ってるんだア？」

「痛エ思いたくなくなったら金目のモン出すんだなあ」

人影は容姿端麗美少女ではなく汚い身なりの男三人組だった。ギラついた目でこちらを睨みつけており、下卑た笑顔からしてどう見ても話し合える性格ではない。一人の男がスバルの胸ぐらを掴む。

「やつべ強制イベント発生… いや、これでフラグが立った！ この後の展開はずっと家に引きこもって異世界勉強しまくってたこの俺には簡単に予想がつく！ 覚醒フラグ…いやいやや覚醒にはまだ早すぎるな… そうだな！これは美少女に助けてもらえる救援フラグだ間違いねエ!!」

「だから何言ってるんだよ！うるせえんだよ黙ってる!!」

三人組の中で危ない雰囲気の方は殴りかかろうとスバルに拳を向ける。しかし「ちよつとどけどけどけ！ その奴ら邪魔だよ邪魔ア！」

焦りに焦った声を上げて誰かが路地裏に飛び込んできた。

セミロングの金髪の小柄な少女だ。その疾風のような俊敏な動きで突っ込んできた少女は小汚い格好であったが強い瞳に覗く八重歯。主人公のヒロインに相応しい設定だ。そんなヒロイン（仮）がタイミングよく多分主人公であるスバルのピンチに駆けつけてきたかのように思えた。

スバルは心の中でガッツポーズを決める。やはりこれは救援フラグだったのだ。義侠心あふれる少女が悪党どもをバツタバツタとなぎ倒……

「なんかスゴイ現場だけどゴメンな！ アタシ忙しいんだ！ 強く生きてくれ！」
「でええッ?! ちよつ、マジですかあッ?!」

スバルの中の秒で組み立てられた設定は秒で崩れ去った。少女は申し訳なさそうに手を上げ、細い路地を駆け抜け、重力を感じさせない身軽な動きであったという間に壁を登り建物の上に消えた。

場に沈黙が続く。それはスバルの一声に破られた。

「今ので毒気が抜かれて気が変わった…なーんて…」

「あるわけねえだろ。身包みまで剥いたらあ」

状況が更に悪くなり、スバルは終わったなと諦めた。

このまま丸裸にされて、路地裏で1人寂しく捨てられるのだろう。何もなし得て無いというのに。

しかしその諦観の色に染まった眼に一つの光が差し込む。なんと三人組の後ろからまたもや人影が現れたのだ。スバルは今度こそ美少女が救援に来てくれたのだと思つた、というかそうであつて欲しかった。先程の経験からあまりいい思い出は無いが事態が好転してくれる最高にクールな一手を決めてくれ頼む！とばりに願つた。

だが

「どげよ」

その声は美少女には程遠く。

同年代のような生意気さを持つて、男たちに投げかけられた。

「邪魔だろうが」

「んだア？ テメエ！ 状況がわかってねえみてーだなあ」

「この場を見られちまったなら、 テメエも出すモン出してもらおうか」

三人組は後ろから突然現れた青年に驚いたが、すぐに薄笑いを浮かべナイフをチラつかせて脅す。

(アイツナイフまで持ってやがったのか！ はあく…挑まなくて良かったあ…)

スバルは血の気が引いていく顔を出るだけ変えないようにする。自分がビビっていたということを悟られないようにするためだ。

あまり意味はないが。

(しかし男…か…。 どうせなら女の子みたいに可愛い男の子だったらよかったんですけどどうまく行かないモンだなあ！ 異世界って！ ってんなこと思ってる場合じゃねえ！)

どうでもいいことに思考を移すのはやめにして、青年に呼びかける。

「おいっ！ アンタ！ ここは俺に任せて逃げてくれ！ アンタの敵う相手じゃねえっ！」

つい救援希望と真反対の声が出たが、漫画でよくあるこのセリフは一度言っ

みたいと思つていた。願いは果たされ、俺つて今メチャかつけえ…と酔いしれる。

「そうか、頑張れよ」

「おいよよよよちよいちよいちよい!! ごめんなさい!嘘です助けてください!!なんでもしますから!! あついやでもなんでもするつてのはやっぱ勘べ…」

「だからうるせエんだよ! 黙つてろ!」

男がスバルの鳩尾に一撃お見舞いする。スバルは胃の内包物がせり上がってくるのを必死に抑え、代わりに渴いた声を吐く。

「逃げようつたつてそうはいかねえぞ」

「お前も同じ目にあいてえか? ああ!?!」

大柄な男がついに青年の胸ぐらを掴む。しかし青年は身じろぎもせず苛立ちながら言った。

「さつきからどいつもこいつも、誰が逃げるつったよ」

その言葉を呟くと同時に大きく振りかぶり胸ぐらをつかんでいた大柄な男を殴りつける。

「グブアッ!」

男は体格の割に軽く吹き飛び壁に激突した。たつたの一撃で青年よりも体格のデカイ男をのしてしまったようだ。

「すッ すげえ……!」

「テメエ……覚悟はできてんだろおーなッ!」

小柄な男が大きく息巻くと小柄さゆえの足元を狙った姑息な攻撃を繰り出そうと飛びかかる。青年の一蹴であっけなく落ちてしまったが。

「なっなっ、なんなんだテメエはッ!」

最後に残った男にゆっくり向く青年。その睨みは圧倒的に三人組のものより優っていた。

掴んでいたスバルの胸ぐらを放り投げ、咄嗟にナイフを取り出す男。男の生存本能がそうさせ、下卑た薄笑いを浮かべる。

「調子に乗りやがって、痛い目見てえか! ああ!?!」

しかし青年の表情は変わらず、こちらに歩んでいく。

「テツメエ……このナイフが見えねえのかよッ!」

次第にナイフの切っ先が震えだす。青年は手首のスナップを切ると。

「来いよ」

自暴自棄になった男はナイフを正確に心臓に向け突っ込んでいく。しかし落ち着いて見れば分かりやすいほど一直線の動きであり避けることは造作もないことであつた。

ラフなスタイルでビツシバツシと悪を倒すその感じ！俺ア感動した！大胆かつ柔軟に!!!まあ多分俺でもあんな小悪党の1人や2人軽々と倒せそうな気もするがアンタみたいに一撃でのしちまうのはちよつと難しいな…だからアンタのところで修行つけて貰うってのもアリだよな！いやー楽しみだなあ色々あったけど異世界で師匠作って最強になつていくつて!!　まるでベストキッド、いやベストスバルだなっ！うん！あのスナツプもメチャカツコ良かったし、今度チンピラにあつた時には『かかつてきな…(ピシヤツ)』つて痛つてえええええ

「おい」

青年は苛立ちながらスバルに向く。

「ハイハイなんでしょーかお師匠様！　俺にできることがあつたらなんなりとお申し付け「さつきからうるせえんだよベラベラベラベラと。　お前と俺はいつからそんなに親しくなつた」

「そんなの決まつてるじゃないっすか！　あん時助けてくれたのを不肖菜月スバル、忘れてやいませんぜ！　いやあ異世界つて悪いことづくしじゃないんだな！と！改めて痛感いたしやしたーツ！」

「うるせえ、喋んな」

「ヒドツ!?!」

青年は一方的に会話を切り上げると隅に止めていたバイクを引き立ち去ろうとした。

「アレ!? それってまさかのもしやで! ば、ばいくでございませよーか?」
「あたりまえだろ。何に見えてんだお前」

青年は呆れながらバイクを押しした。

いや待て。 先程このスバルとか言う奴はバイクと言った。通りすぎる人と呼べるかわからない通行人たちが奇怪な目で見つめてきた中で。彼一人だけが、こいつの存在を知っていたのだ。

咄嗟に青年は振り向く。スバルは不敵に笑い語りかけた。

「フッフッフ… そうアンタとオレは同じ、異世界召喚されたんだよ」

「何馬鹿なこと言ってるんだお前」

「いやちよつとお!? 今の流れでそれ言うかフツッ!? そこは乗ってもらわないと俺が傷つく!」

スバルは不敵な笑みを一瞬で散らし、地面に膝をつく。あまりにも大袈裟な動きに青年は少し気味悪がった。

「どいつもこいつも妙な格好しやがって……ようやく出会えた事情を知ってそんな奴は思いつきりバカときた」

「いやーどうもバカです。ですが役立たずではなく情報屋としての二面性も持つてるのですヨ?」

「そうか、じゃあ東名高速道路はどこに行きやいいんだ」

「すみませんそのような情報は持ってないです!ごめんなさい!」

再び地に膝つけて土下座をする。しかしかなり不恰好なものだった。

「チツ、どうやって帰りや良いんだよ……」

「あ、あのー、多分帰れないと思いますハイ」

「なんでお前にそんなことがわかるんだよ」

「なんてったってここは異世界だからなあっ!!」

スバルはドヤ顔で決めポーズをかます。昔読んだ漫画のポーズを参考にしたので完璧に決まったと思うが、そのポーズはイケメンにのみ許されたものである。

「またそれか。…………お前、仮にここがその異世界だとして、なんでそんなに元氣そうなんだよ」

青年が面と向かって問いを投げかける。

スバルはこれは一種の分岐ルートだな！ 外すわけにはいかねえ！ まずは
真実をきつぱり話し、好感を得る！そこから俺の異世界ライフは始まりを告げるのだっ
！

と思ひ込み真実を話すことにした。

「まあ結構こういうのに憧れてたワケだし？ 元の世界に戻ってもあんまし良いこと
ねえからここでなんか伝説作つていこうって思ったんだ！ 現代の知識を使つてあら
ゆる世界で無双したりとか！ 特殊能力を持つて悪い奴らをぶっ倒してハーレム築い
て！ どれも元の世界じゃできないこと！ 俺はそれをやりたいんだ！」

「それで、出来そうか？」

「さつぱりでございます… まあ俺たちを召喚した美少女さえ現れてくれれば今までの
文句ぜんぶナシになるんですけどおー！ どうなつてんだあ！ 異世界の神イ！」

とスバルは悪態をつく。事も無げに告げたその言葉に青年は呆れていた。

「まあ俺はまだ17だしアンタも見た感じ同じ年齢かな？ 先は長いことだし、この異
世界ライフと一緒に堪能していきましょーよっ！ 改めて俺の名前は菜月スバル！

アンタの名はっ……！」

空気が読めないスバルでも察することができた。今明らかに空気が悪い。

一体どこで俺は選択を間違えた？ 自分が言った言葉を一つ一つ脳内で巡らせるが気分を害させるような言葉は言ったつもりは一切無い。しかし目の前の青年はスバルの言葉に驚いたような複雑な表情を向けていた。

青年の目がスバルの目を捉える。

「あ、あの、なんか気分悪くするようなこと言っちゃったか…？ だとしたら、ご、ごめん…」

「いや… なんでもない」

そう言っただけで青年は目を逸らした。

（いや絶対え気にしますってその表情…。 だれかこの状況変えてくれる誰か… 助けて…）

スバルは複雑な空気を壊してくれるだれかに助けを求めていた。

奇しくもその救いの手は差し伸べられることとなった。

「……そこまでよ、悪党」

そこには美しい銀色の髪をもつ少女が紫紺の双眸を青年に射抜いていた。

精霊使い

腰まで届く銀色の髪を一つにまとめ、理知的な印象を漂わす少女は、その美しい外見から放たれるとは思えないほどの鋭い瞳で二人の青年を映す。

銀鈴の様な声色が長髪の青年に向けられる。

「それ以上の狼藉は見過ごせないわ。 観念なさい」

「いきなり出てきてなんだよ」

長髪の青年は面倒に巻き込まれなくなさそうに睨みつける。

しかしその睨みに少女は一切の動揺もせずただ見つめ返すだけであった。

（うおおッ！ ついに異世界の美少女とご対面キターツ!! 上手いこと妙な空気も消えてったし、ここは俺がビシツと決めてだな…）

スバルはいつもの調子を取り戻し、長髪の青年を諫めるように前に出た。

「まあまあ落ち着いてお二方！ ここは一旦怒りを抑えて抑えて…」

「おまえは黙ってろ」

「アツハイ、黙ります」

スバルの渾身の仲裁は青年の一声で無駄となった。

青年の態度の悪さから少女はいつそう目が鋭く尖っていく。

「ねえ、潔く私から盗ったものを返してくれないかしら。——今なら、命まで取ろうとは思わないから」

「だからなんのこつたよ、俺は関係ねえよ巻き込むな」

少女の脅しともとれる要求に青年は身に覚えがなく無罪無関係を主張する。

それはスバルとて同じであつた。

(なーんか妙な食い違いが出てるなあ： よしここは俺がスパツと白黒つけてだな：)

「あーそこなお嬢さん！ 多分アンタが言ってるその物盗り？ この人じゃないと思わず？ 何しろこの方は俺を窮地のピンチから救ってくれたためちやカツケナイスガイなんだからな！ そんなセコイことするわけがねえしますまずアンタみたいな超絶美麗！ 正に湖の白鳥！ シティーハンターという榎村香！ タッチという浅倉南！ セーラームーンでいうええと」

「ごめんなさい、ちよつと静かにしててくれる？」

「アツハイ、静かにします」

またもやスバルの発言は少女の一声で無に帰してしまった。倒れ込み落ち込むスバルを尻目に少女は再び青年に問う。

「で、さっきの子の話によるとどうやらあなたはあの犯人ではないということね？」

「当たり前だろ。盗んだ奴がここで堂々ともたついでる場合かよ」

青年はやつと解放されたか、という感じに溜息をつく。スバルも誤解が解けてホツとしたようだ。少女も納得がいったように頷き、続けて質問する。

「それもそうね… じゃああなたは私から徽章を盗んだ犯人に心当たりがあるかしら？」

「……………なんだ徽章って」

「大切なものの、竜を象ったバッジなんだけど」

「知らないね、他を当たってくれ」

青年はハンドルを握り立ち去ろうとする。時間の無駄だとわかり先を急ごう

とする少女。しかしスバルは先程から倒れ込んでいたのが嘘のように飛び上がり叫ぶ。

「ちよおつと待ってくれ！ どうやら俺のちっぽけな脳内にその盗つ人の手がかりがあるような気がするぞお！」

「え！ ホントに!? ……こほん」

その僅かながらに見せた一瞬の瞳にスバルはドキつとした。頬に一瞬熱が差すのを感じる。それを隠すように頬をポリポリとかく。

「あー…えーと多分盗んだ奴の特徴ならわかります。八重歯が目立つ金髪少女で身長

も年齢も君より二つ三つ下だと思っただけ」

「そう、情報感謝するわ」

少女は冷たげにそう言うと、金髪の少女が向かっていく先に歩いていった。その先は賑わっている通りとは違い、危険な空気を孕んでいた。

「お、おい！ 1人じゃ危ないって！ 俺らもその徽章探すからさ！ 三人なら見つかる確率も高いし、三人で徽章捜索隊と行こうじゃない!!」

スバルの唐突な提案に少女は疑念の表情を浮かべる。青年はその捜索隊の中に自分も入隊させられることに顔をしかめた。

「なんで？ もうあなた達と私は無関係の他人です。ほんの一瞬人生が変わっただけの赤の他人」

「そんな心にくるようなこと言わないでくれよ!? 俺らはまだ全然まるつきし終わったなんて思っていない！ そうだろ相棒！」

「いやそいつの言う通り赤の他人だ。もちろんお前ともな」
「俺は異世界でもボツチなのかよおおッ!!」

最近倒れ込んで泣くことが多いなどスバルは頭の中で考えながら倒れこむ。少女は心配気味にスバルを一瞥すると路地裏の奥に向かう。

「じゃあ、私もう行くから」

「ま、待って…」

このまま少女とのイベントは終了するかに思えた。

「そういえば、まだ情報の対価をまだ支払って無かったわね」

そういうと少女は振り向きざまに掌を向ける。その掌から拳大程度の大きさの飛礫がスバルと青年に放たれていた。

「え…」

と声をあげる暇も無く、飛礫はこちらに向かっていた。

しかし飛礫は彼らに当たりも掠りもなく通り抜け、いつのまにか復帰しており背後から攻撃しようとしていた三人組に直撃する。

振り返れば、そこには激痛で苦鳴を上げて吹き飛んでいくのが男たちがみえた。彼らの脳天に命中し、傍らに音を立てて落ちた飛礫。スバルはそれを拾い上げまじまじと眺める。

「冷てえ…」

それは季節感や法則を無視した氷の塊であった。役目を終えたかのように大気に溶けるように霧散した。

「――魔法」

とつさに口からこぼれたのは、今の現象を説明するのに最も適した単語だった。青年もこの常軌を逸する現象に戸惑いを隠せないでいるようだ。

「これで対価は支払われたわね。それじゃ、今度こそさよなら」

少女は満足げに頷くと再び奥に向かう。するとスバルは勢いよく立ち上がり駆ける。

ここでまたチャンススを逃してたまるかとばかりにスバルはホコリかぶった脳みそをフル回転させ、少女の前に躍りでた。

「何？ まだ何か用？」

「ああーツいやあ助けてくれてどうもありがとう感謝感激雨あられ！ お礼といつてはなんだけども徽章と一緒にお探しましょう！」

スバルはオーバーなアクションで少女に跪く。少女は戸惑いながらもこれを拒否する。

「気にしないで。アレは情報への対価だから、等価交換ってわけ。だからこの話はもうおしまい」

「いやいや！ このだだっ広おい街の中！ 薄暗あい路地裏で！ その大切な徽章を君1人で探すのは困難極まれり！ ならば事情を知ってる三人で探した方が絶対いいに決まってる！」

「おい、なんで俺が入ってんだよ」

青年は巻きこまれるのはゴメンだとばかりに反発する。

「何より年端もいかない困ってる女の子を見捨てるなんて男が廃るつてもんです！

ねえ！相棒！」

「相棒じゃねえ馴れ馴れしくすんな」

その初対面とは思えぬ奇怪なやり取りに少しばかり微笑むと。

「変な人たち。でも大丈夫よ、一人で探すわけじゃないし」

「その通りい〜！」

少女の声を引き継ぐようにして、中性的な高音が跡地を震わせる。一体どこから発せられたものかスバルは視線を彷徨わせる。入り口にも奥にもそのような人物らしき影は見当たらない。

見せつけるようにして左手を差し出す少女。

差し出された掌には、手乗りサイズの小さな直立する灰色の猫だった。その尻尾は特別長く普通とは違うというのを明らかにさせていた。

スバルとはまじまじとその子猫を見つめる。

「精霊つてやつか？ まさか」

「そーだよー。あんましじろじろ見られるのもアレだね。照れるね」

そういつて子猫は前足で顔を洗う仕草をする。

「私にはバックがついてるから、実質2人。だからそんなに心配することはないわ。困った時も2人で乗り越えてきたし」

「なるほどなあ……そうきたかあ」

スバルは思案でひねるに捻って理由を探した。彼女のどこかお人好しな性格やたびたび見せる少女の一面に惹かれて、どうか彼女の助けになりたいと思い、発言してきた。

スバルもまたお人好しな性格であった。そんな彼の一途なる思いに神が祝福したのか。

お人好し魔人は天から授けられし光の一手とも呼べる理由を考えついた。

「そうだッ！ 君さつき等価交換って言ってたよな！ 実はそれについてお話があります！」

「手短にお願い。本当に急いでるの」

「なあに簡単かつ分かりやすいおはなしですよ……ふっふっふ」

スバルは意味深な笑顔を浮かべて青年をちらりと見る。青年はその妙な笑顔に眉間のシワを深めた。

スバルは語り出した。

「君と俺は情報と敵の排除ってことで交換が成立したわけだ。ここまでオーケー？」
「おーけー……？ ええわかってるわ」

突然青年が気がついたかのように目を開く。

「おいお前「しかし！」そこなロン毛の男は君に対してなんの得も与えてない！ これでは君の方が損してるじゃないか！」

スバルは勝ち誇ったようにニンマリと笑う。青年はスバルをこれでもかと言うくらい睨みつけていた。少女は少しばかり思案し、応えた。

「でも、情報を持ってないって情報を手に入れたんだし……それで私はいんだけど」
「でも彼の言い分も頷けるよ。なんてたつてリアはあの青年のピンチも救ったんだもんね」

子猫はおおっぴらに同意し、青年は勢いよく反発する。

「バカ言え！ あんなの俺一人でも対処できたぜ。お前の余計なお世話なんだよ」と青年は突き放す。

しかし子猫は更に食い下がる。

「でも助けてもらったことは事実だし……？ せめてお礼ぐらいは言わないと恥ずかしいよねえ」

子猫が意地の悪い笑みを浮かべる。

「とうわけだ！」

言い切った後に友好の印として手を差し伸べるスバル。少女は思案を巡らせ、子猫に意見を求める。

「邪気は感じないし、素直に受け入れた方がいいと思うよ？ 2人で探すと言ってもやっぱり広大だからね。人数は多い方がいいよ」

子猫の意見を受けて少女は数秒悩むと、ようやくその手を掴んだのだった。

「俺の名前は菜月スバル！ 絶体絶命の一文無し！ よろしく！」

「……………サテラとでも呼ぶといいわ」

「——趣味が悪いよ。 うん、そして僕はバック。よろしく」

それぞれの自己紹介が済んだ後、長髪の青年に視線が集まる。

「……………なんで俺まで名前を言わなきゃいけないんだよ」

「いや、今この流れは言うべきでしょ…もしかしてアンタ俺以上のコミュユ症…？」
「余計なお世話だ」

「パツク。なんであの人たちを仲間にしたの？特にあの長い髪の男の人。随分積極的みたいだったけど」

「まあ彼にちよつと個人的な興味があつてね。見た感じ邪念は見られなかったよ。性格に難ありだけど」

ー
ー
彼のマナ

少しばかり不思議なんだ

まるで人じゃないみたいだね

盗品蔵にて

徽章盗難の犯人探しはそれほど苦勞することはなかった。

犯人の目立つ格好に特徴は路地裏で知らないものは少なく、よく出入りしている場所の存在も聞き込みで知ることができた。

3人と一匹はその場所である盗品蔵に向かった。

道中でサテラが青年のバイクとバイクに置かれた銀のアタッシュケースを指差す。

「そういえばあなた、不思議な大荷物を抱えてるのね。その銀色の箱みたいなものだった、鉄の……子牛？ みたいなそれとか。何に使うの？」

青年はどのように答えるか少し思案すると。

「……コレはバイクだ。馬とか、そんな感じの解釈でいい」

ズッコケるスバル。

「ええ……ちよつと説明が雑すぎやしませんかね……？」

「いいんだよ説明するのもめんどくさい」

青年は冷たく言うともた重いバイクを押し歩いた。

思案顔になり、突然「閃いた！」と言い指を鳴らすと、青年にある提案をした。

「あのさ、論より証拠っていうことわざがあるように口でいうより体験させてやった方がわかりやすいんじゃないか？俺をほんのちよつと後ろに乗せて走らせるだけで……」
「だめだ」

青年はその提案を一蹴する。

「ああガソリンが無いのか。なら仕方な……ってメーターが80%ほどあるのですが」「燃料がもつたないだろ。なんでそんなことしなきゃなんねえんだよ」

そう言いこの話は終わりというように速く歩き始める。

「アレは走るものなのかしら？　ますます不思議ね。荷車にしては小さすぎるしそれを引くのが人って……非効率ね」

「さっきガソリン？　という単語が聞こえてきたんだけどそれはあの荷車と何か関係してるのかい？」

サテラは呆れ興味を失い、バックは物珍しい単語に興味を示した。

「ガソリンってのは燃料……あつ、あの鉄の荷車のご飯みたいなもので……ええーと」「へえ、というところあの荷車は生き物ってことかい？　とてもそうには見えないけど」

「いや、今のは比喩的表現っつーか……あーッ！　日常的にあるものだったのにいざ説明するとなると何も出来ねー!!」

嘆くスバルだったがバックはどうやら理解した上での意地の悪い質問だったよ

うだ。

少しニヤついている。

「スバルうゝ、燃料くらい僕らにもわかるよ。そのガソリンとやらを燃やしてその熱であの鉄の荷車は動くんだね」

「引く動物も無しに動くの？　ちよつと見てみたいかも」

サテラはまた興味を示し出す。

「圧倒的理解力に脱帽っ！　ちつくしよおゝわかつてやつてやがったなあ？」

「僕らを甘く見るから悪いんだよ？」

「そんな悪い子猫ちゃんにはこうだ！　もふもふ攻撃！」

そういつてスバルは子猫を優しく素早く掴むとモふりだす。しかし通常の猫の毛並みでは味わえない感触に驚嘆する。

「うおおゝ…　モフリストと呼ばれしこの俺を唸らせるほどの素ン晴らしい毛並み…　参りました」

「勝手に攻撃して勝手に自滅してくれるなんて、楽でいいや。今度の戦闘の時には敵にモフラせるつてのはどーお？」

「やめてください。その攻撃は俺に効く」

「多分それはスバルにしか通用しないわね。それ以外にやったら途端にこの世とバイナ

「ラよ」

「バイナラってきょうび聞かねえなあ……」

「もう、冗談はよしこちゃんよ」

「それもきょうび聞かねえなあ……」

会ったばかりにしてはだんだんと打ち解けていくスバルたちを尻目に青年はバイクを押し歩いていく。今日一日ずっと歩き回ったのでまあまあ疲労しており、この借りを返したらさつさとコイツらがいない所に行こうと考える。

しばらく話し込み、日が落ちあたりが更に暗くなるころ、思い出したようにサテラがアタツシケースを見つめる。

「この箱は一体何が入ってるの？」

ケースについてはスバルも知らず興味深々に頷く。

青年はバイクを止め、ケースを忌々しげに見やるとただ一言。

「……大したもんじゃない」

その目はどこか哀愁を帯びている。

吹けば飛びそうな眼差しは消失し、重い荷物を再び押し歩く。

「そう……」

サテラは何かを察したように会話を切り、少し気まずそうにする。それをみて青

年は表情が僅かながらに緩む。

「ちよつといいかしら…?」

サテラが恥ずかしそうに話しかける。

「なんだ」

「あの、もしよければそのばいくって荷車に乗せてもらいたいな…なんて」

サテラは玉のように白い肌を少々火照らしながら頼み込んだ。そのお願いに青年は渋々ながらも、

「気が向いたらな」

と顔も合わせずそう言った。

スバルは俺の時と対応が違うことに唖然としたが、サテラはこの青年がそれほど悪い性格ではないと知り、

可愛らしく微笑んだ。

やがて3人は盗品蔵の前へと到着する。

「もうすつかり日も落ちちやったな」

「ええ、ここからが正念場よ気を引き締めなくちゃ」

辺りはすでに暗くなっており、昼間の喧騒が嘘のように静かであった。

周りは虫の鳴き声小さく響き、劣化した建物が見る人を不気味に感じさせる。
「そーいやあの猫みたいなのが見当たらないが」

青年はふと疑問に思う。

「パツクは夜になると寝ちやって朝まで出てこないのよ」

「んだよそりゃ… 期待外れにもほどがあんだろ」

一番の戦力であろう精霊がこの調子では先行きが不安になる。

青年はバイクを安全なところへ停めに行くから先へ中に入るよう促した。

「じゃ、中入ってるから。途中で逃げたりするのはメツだからな！」

スバルは指でバツマークを作る。

「当たり前だ、誰が逃げるかよ」

青年はピシヤリと言い放ち、スバル達と離れる。

「さーて、いよいよつてとこだな！ 噂によれば盗品をまとめてる蔵主が居ると思うけど、どんなシチュエーションで参ろうか？」

「正直に行くわよ。盗まれたものがあるから返してって」

「うん確実に追い出されるなこりゃ…」

道中で何度も話したはずだがサテラは自分の主張を曲げることはなかった。

スバルはこじれる可能性もあるので自分から申し出た。

「あー、わかった。じゃあこは俺に任せてくれ」

「…大丈夫？ 私も一緒に行つた方がいいんじゃない？」

「いやこういうことには意外と慣れてるんだ俺。 中の主人とある程度話し込んだら

君を呼ぶよ」

「…わかった。スバルを信じてみる」

スバルは破顔すると所持品をいくつか持つて入口へと向かう。この異世界では珍しいものばかりなので良い交渉材料にはなるだろう。

木造の扉をノックし、呼びかける。

「あの一すいませーん、どなたかご在宅でしょうか？」

中からのリアクションは帰ってこない。取手に手をかけると音を立てて開いた。

中は完全な暗闇で何も見えず、淀んだ空気と臭いがさらなる恐怖を呼ぶ。

意を決して中に踏み入れる。

ケータイの光を頼りに進んで行くと小さなカウンター、割れた木箱、価値のあり

そうな盗品が棚に並べられているのが視認できる。

人気は全く感じない。

「もしかすると店主は用があつていないのかも？ 一旦出直すか」

そう考えて開かれたままのドアに向かおうとする。

ピチャリリーと不意に粘着質な音が聞こえ、足の裏に違和感を感じる。

「え？」

足を持ち上げ靴裏を指先でなでるとべつとりとした液体が付着していた。

本能的な不快感が込み上げてくる。

ふと顔を上げれば、淡い光源が

「」無残な老人の死体を照らした。

「っ」

息が止まる。

口から空気が漏れていた。

「」ああ、見つけてしまったのね。それじゃ仕方ない。ええ、仕方ないのよ」

次の瞬間、ドス黒い熱を吐き出していた。

バイクを誰にも見つからないような場所に停めると、必要ないと感じたのかア
タツシユケースを置いたまま盗品蔵へ向かう。

すつかり辺りは暗くなり虫の鳴き声が耳に入ってくる。

少しばかり遅れてしまった。

なるべく近くに停めようとしたが通行人が珍しがって近寄ってくるのでそれ避け
ては避け、ついには数分もかかってしまった。

なるべく急ぎ足で歩いて行くとやがて盗品蔵が見えてきた。

すでに2人の姿は無く、中に入ったのだらうと考え自分も中に入ろうとする。

しかし、扉の前でひどく嫌な気分が襲ってくる。中に入っ
てはいけないものの上に立っているような。

悪寒が肌をなでる。

扉の向こうに聴覚を集中させると、なんと中からスバルの呻
き声が聞こえてきた。迷わず扉を乱雑に開ける。

月明かりに照らされたサテラの手が目に入る。すでに冷たくな
っていた。

間に合わなかった。

スバルも同様に倒れこむ姿が見える。

駆け寄り呼びかけた。

「おいッ！ 大丈夫か!? 何があった!!」

「や、ばい… し…ろ…」

スバルの虚ろな目は青年の後ろを示す。

後方で空気が歪む気配を感じ取る。

意図を理解した青年は背後から振るわれるナイフを回避、襲撃者に怒りの蹴りを食らわす。

襲撃者は思わぬ反撃に怯んだのか後方に跳躍し距離をとる。

青年は素早く臨戦態勢に入り敵を視認する。

僅かなスバルのケータイの明かりからその姿が照らしだされる。

人間の女のようなだった。

しかしあの跳躍力と残忍な行動から人間の形をした化け物という印象だった。

女は妖艶に微笑む。

「ーうふふ… 素敵な人」

その笑みから捉えようもない多大な緊張がのしかかってくる。

青年はその緊迫感に怯むことなく、

「おまえが、やったんだな」

確認ともとれる問いを投げた。

女はさらに口角を上げると、

「仕方が…なかったのよ？」

微笑みながらそう言った。

青年に激情が走る。

身体中のかなにかが細胞を駆け巡ってゆく。

自分が自分では無くなっていくようだ。

本能が変わりゆく身体に命令を下す。

この女は危険だ。

早く、

早く殺さないで。

薄れゆく意識の中でスバルは冷たくなった少女に手を伸ばす。

「俺が… 必ず、お前を救ってみせ…」

誓うように心に刻みつけ、手を握る。

最後に瞳に映った景色は、

灰色の異形が忌まわしき襲撃者と激戦を広げていた。